

清貧の思想と贅沢の思想

塩野谷 祐一

(財団法人家計経済研究所 会長)

中野孝次の『清貧の思想』という書物は、金銭欲と所有欲が支配する現代社会の趨勢に抗して、西行、長明、兼好、芭蕉、良寛、その他大勢の日本の文人たちが追求した文化の伝統を「清貧」を尊ぶ思想として論じたものである。その思想は、脱金銭、脱所有の生活態度に徹することによって、精神の自由を確保し、富裕や権勢や栄達以外に重要なものがあることを発見しようとするものであって、宇宙と自然の中に人間の魂や生命そのものの充足を図るというものであった。これらの文人は随筆や詩歌や書画をものする人々であったが、彼らの思想の背後には仏教の哲学があったに違いない。禁欲の生活態度は、魂の救いや悟りと深いつながりを持っているからである。

その中野孝次がC. G. クロコフの『贅沢の思想』という本をドイツ語から翻訳している。後者によれば、贅沢は人間にとっての必要不可欠なものを超えるものであり、自由の象徴であるという。ところが、近代社会はこのような贅沢を敵視し、汗水たらして労働することを神聖な規律とみなした。いってみれば、贅沢は労働によって代替され、それが生み出す多様な生産物を大量に消費することが贅沢と考えられたのである。このような社会では、労働による新商品の生産が絶えず求められ、閑暇を楽しむ心が失われていった。『贅沢の思想』はこのような近代社会の批判を通じて、真の贅沢への回帰を主張するのである。清貧の思想と贅沢の思想とは、直接の表現は対照的であるが、物から心への復帰を教える点で同一である。

ゾンバルトの『贅沢と資本主義』が論じているように、資本主義の体制は物質的贅沢の拡大による経済発展の体制であった。問題は、例外的に一部の世捨て人が風雅の贅沢を楽しむというのでなく、社会の体制そのものが清貧を通じて贅沢を享受することは可能か、あるいは贅沢を清貧の拡充に向けるにはどうすべきかということである。2つの点について経済哲学的考察が必要である。

第一に、清貧ないし贅沢の思想が単なる反経済主義に終わらないためには、清貧ないし贅沢の概念を経済的範疇としてとらえることが必要である。この目的にとっては、贅沢の概念から出発するのが適切である。贅沢とは、必要不可欠なものを上回る余剰と定義される。人間にとって必要不可欠なものを基礎的ニーズと呼ぶならば、社会が達成している生産力の水準からこの基礎的ニーズを差し引いた残りが社会的余剰であり、これが余分なものとしての贅沢に向けられる社会的原資である。この贅沢の具体的形態を選択するところに、社会選択における人間の自由が働くときといえることができる。そしてその自由の発揮の仕方が、あるときは卓越したものとして称賛を呼び、あるときは無分別なものとして非難を生むのである。

産業社会は、この社会的余剰を利潤獲得のための資本投資に向ける。福祉社会は、これを基本的ニーズを満たさない社会的弱者への所得再分配に向ける。封建社会では、これはピラミッドや宮殿や軍隊や、総じて支配者の威風を誇示することに当てられた。清貧の思想は、社会的余剰

を精神の充足に向けることを主張する。これほどのような経済社会体制であろうか。

清貧の生活は、一方で、自発的に生存のぎりぎりの水準において、衣食住のニーズを最も簡素な形で満たし、他方で、何らかの余剰を基にして風雅の創造、心魂の救済に従事するというものである。この意味で、清貧はけっして非自発的な貧困ではない。強いられた貧困においては、人間は挫折感の下でぎりぎりの衣食住を賄うのに精一杯であって、充足した精神的活動の余地はない。山里にあって花を愛し月を愛でた西行も、僧庵にあって小鳥たちに神への感謝を説いた聖フランシスも、自発的に清貧を選び、みずからの蓄えや人々の喜捨に依存して生きてに違いない。清貧は余剰の使用形態であり、一つの経済生活の型である。

第二に、このような経済生活の型を支える倫理的基礎は何か。いいかえれば、金銭欲と所有欲の経済生活よりも清貧の経済生活が望ましいと考える根拠は何か。それは「徳」の倫理学によって答えられなければならない。「徳」の倫理学は、人間の存在の質を道徳的評価の対象とするものである。それは「正」の倫理学や「善」の倫理学とは異なる場面で働く。「正」が社会制度の規範であり、「善」が人間行動の規範であるのに対して、「徳」は人間存在の規範である。それは人間の性格・選好・心のあり方を問うものである。人間本性はさまざまな能力の束からなるが、「徳」はこれらの能力を発揮し、卓越した成果を挙げることを要請する。「徳」のリストとして、叡智、卓越、仁愛、同情、真実、誠実、正直、責任、節制、慎慮、忍耐、純潔、勇氣、謙讓、協調、信頼、寛大などが挙げられるが、これらの修身的徳目は人間を存在（ストック）と見なし、その人格の向上を求めるものである。それは自分が自分を律する倫理である。「正」の倫理学および「善」の倫理学に比べて、「徳」の倫理学は学問

的にも実践的にもなおざりにされてきた。その復興が求められている。

その際、文芸や宗教の活動のみが「徳」を導くものではない。それらは「徳」がどのようなものであるかを発見するための象徴的な活動にすぎない。むしろ、日常的な社会的・経済的活動の中で「徳」を実践することが必要である。そのことは、支配的な社会的・経済的活動の原動力である「善」の質を批判的に評価することによって、社会的・経済的活動そのものを有徳なものにするということの意味する。この意味で、清貧の思想は金銭欲と所有欲によって支配された市場的社會を批判し、その中に流されている自己を反省的にとらえるという役割を担う。

「徳」は社会の第一次的ルールである「正」に優越することはできないが、「善」には優越する。人々が主観的に望ましいと考える「善」の観念、すなわち人々の欲求や幸福の内容は不可侵ではない。人々が市場の論理に従って欲求を満たすことのみが良き社会のあり方ではない。人間本性に照らして「善」のあり方は改訂され改善されなければならない。これが「徳」の機能である。

社会とその活動を有徳なものにするための実際的方策は、人間存在の能力を高めるという「徳」の原点から判断されなければならない。「徳」の成就を卓越と呼ぶ。生活の質を問い、人間のための経済を求める思想は、「徳」の規範理論によって基礎づけられなければならない。人間存在を重視する社会は、単なる利己心を原動力とする市場経済によっては実現されえない。人間の利己心を社会的卓越の達成に役立てるような制度的仕組みが必要である。日常的な豊富から原点に立ち帰って清貧としての贅沢を追求する心が、質の高い生活を可能にし、有徳と卓越の社会を目指すことができるのではないだろうか。

(しおのや・ゆういち)